錦城高校新聞

題字　井口　文章

再刊　第３０１号

印刷・発行

錦城高等学校新聞委員会
編集室 2019

みんなでつくる
錦城高校新聞

今号は総合文化祭優秀校東京公演　特集！

一面：繰り広げられた青春の舞台
縁の下の力持ち、舞台係に取材

二面：２日目も大盛況の国立劇場
公演に思いを寄せる来場者の声

２０１９全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演　１日目

全国の高校生が織りなす文化

第30回東京公演に参加

8月24日(土)・25日(日)、国立劇場で第30回全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演が行われた。錦城高校と本郷高校の新聞委員会は記録係として、リハーサルを含め４日間参加。全国大会で優秀な成績を収めた高校生たちが、国立劇場という大きな舞台で輝く姿を取材した。（錦城・本郷高校共同取材）

躍動感溢れる動きで観る人の目を惹き付ける南多摩中等教育学校の演奏

男気溢れるソーラン節　国際高校

都立国際高校の「國際男児」による『ソーラン節』から、東京公演は始まった。力強い掛け声と共に曲がかかり、照明の転換も多彩。23人の男子が踊る大迫力のソーラン節は、終始観客を魅了していた。

本番での演技を「満点」と評価する代表の斉藤優介くん（2年）は、メンバーのやる気もあり、本番を楽しめたという。「代々ソーラン節を踊ってきて、初の舞台が国立劇場となりました。とても良い経験になりました」と話した。

観客と創るステージ　府中高校

同じくオープニングを担当した都立府中高校Ｊａｚｚ部の演奏は、トランペット、トロンボーンとサックス２人による四重奏からスタート。『sing sing sing』では観客も手拍子で一体となり、最高潮の盛り上がりを見せた。

部長の酒井まひるさん（２年）は「楽しく演奏できました」と本番を振り返る。リハーサルは緊張していたものの、本番では笑顔で演奏できたという。また、お客さんも楽しんでくれていたため本番の演奏を「100点」と評価した。最後に部員へ「これからも真面目に楽しく頑張ろう」とメッセージを送った。

川の流れを巧みに表現　創価高校

荘厳な演奏が大河を連想させる

箏曲『大河』を披露した創価高校箏曲部。劇場内の静寂を破るようにして36人の演奏は始まる。一糸乱れぬ旋律や各パートの指先まで揃った姿に観客は魅了されていた。

演奏終了後、部長の佐々木優奈（3年）さんと技術部長の力諒子（3年）さんの２人にインタビューした。「演奏する人数に上限がある総文祭と違い、東京公演では部員全員で演奏できるので、とても嬉しいです」と佐々木さん。また３年生は今回の東京公演を最後に引退するため、力さんは「これからも感謝を忘れずにがんばっていってほしいです」と後輩にエールを送った。

「詩をうたう」ような音色　橋本高校

箏曲『絃歌』を演奏した和歌山県立橋本高校は、５つのパートごとの演奏が印象的だった。総勢20名が奏でる雅やかな演奏は、観客の心を魅了する。曲の途中では箏柱をはじくなどの演出をし、音だけでなく動きでも多彩な音色を表現した。

本番後「練習の時にはいなかった１６００人ものお客さんがいて緊張したけど楽しめました」と森本実里さん（３年）。また、部長の西本爽帆さん（２年）は「今までで１番良かった演奏をすることができ、支えてくれた人に感謝を伝えられました」と笑顔で話す。西本さんは本番の演奏に１００点満点中２００点と点数をつけた。

大迫力の演舞で魅せる神楽　由布高校

大分県立由布高校は『天孫降臨』という神楽を披露した。この演目は天鈿女命と猿田彦命の掛け合いから始まり、太鼓や笛の演奏と共に話が進む。中盤の神々による舞では、掛け声とともに８人の演者が舞台を縦横無尽に踊り回る。演奏が盛り上がるにつれて演目は終盤に近づき、花道での迫力のある舞には盛大な拍手も起こった。

郷土芸能部部長の園田唯我くん（３年）によると、演舞中はお互いに声を掛け合い、メンタル面で支え合ったそう。「お客さんが演技の途中で拍手をしてくれたのが嬉しかったです」と笑顔で話した。

舞台全体を大きく使って迫力ある舞を披露する赤鬼(由布高校)

会場に響く八丈太鼓の音　南多摩中等教育学校

会場中に響き渡る力強い太鼓の音。観客を魅了したのは『八多化の響き』を演奏した都立南多摩中等教育学校の太鼓部だ。大中小合わせて18個の太鼓を使い分け、様々な音を作り出す部員たち。観客は太鼓と人の創り出す圧巻の世界観に引き込まれた。

部長の谷口大地くん（３年）は「大好きな太鼓部の仲間たちと、息の合った演奏ができて良かったです」と本番を振り返る。さらに副部長の野路秋音さん（３年）は「東京公演に初めて出たので、幕が上がった瞬間は少しうるっとしました」と話す。東京公演で部活を引退する２人は「太鼓部の厳しい練習がつらく感じる時もあると思うけれど、諦めずに努力し続けてほしいです」と後輩にエールを送った。

演じられた放課後の「日常」　帯広北高校

帯広北高校が演じたのは『放課後談話』だ。人数が少なく廃部の危機に瀕したとある演劇部。残った部員の賀来が、友人の松下を演劇部に誘うという実話を基にした２人劇である。ごく普通の雑談の中、思わず笑ってしまうようなユニークな会話で観客を楽しませた。

出演した賀来海穏くん（１年）と、松下結翔くん（２年）は本番後の感想を「お客さんに笑ってもらえたことが嬉しかったです」と口を揃えて語る。今後の抱負を聞くと「演劇を始めて日が浅いので、発声などの基礎練習を頑張りたいです」と賀来くん。また、松下くんは「これからもこの劇のように、１人でも多くの人を笑顔にしたいです」と答えた。

屋久杉を守る島民を描く　屋久島高校

公演１日目のトリを飾ったのは鹿児島県立屋久島高校の演劇『ジョン・デンバーへの手紙』。高度経済成長期、島民に親しまれてきた屋久杉が大量に伐採された。島の自然を愛す主人公は屋久杉を守るため、友人たちと森林伐採の現状を伝える映画の制作を始める。数々の苦難を乗り越え、その後ジョン・デンバーの楽曲を主題歌とした映画『屋久島からの報告』が全国に公開された。この活動により屋久杉伐採反対の声が高まり、伐採の中止が決定。世界自然遺産にも登録された。これは実話を基にしている。

屋久杉の減少に対する悲痛な叫びや屋久島の自然を愛する心が感じられる演技に、観客は終始圧倒される。終演後も会場には拍手が響き渡り、１日目の全演目が終了した。

公演成功へ陰から支える舞台係

開場前に来場者用の椅子を設置する舞台係

獨協高校の鈴木晴斗くん（１年）、是枝大くん（１年）、松本錬くん（１年）、大橋建斗くん（１年）は、舞台係として陰から東京公演を支えている。仕事内容は、太鼓などの大道具を楽屋から舞台、舞台から楽屋に運んだり、プロの大道具係の方々にお茶や食べ物を渡したりすること。リハーサル初日は、トラックで運ばれてきたたくさんの大道具を舞台に運んだそうだ。

「リハーサルの２日間、多くの仕事をこなしていたので、本番での作業は準備万端です」と鈴木くん。また是枝くんは東京公演参加校の生徒から、廊下などで感謝の気持ちを伝えられることが嬉しいと話す。舞台係が裏方の仕事であることに触れ「観客の目には映らない場所の仕事が多いですが、自分の仕事に誇りを持って頑張りたいです」と笑顔。松本くんは「この東京公演で学んだことを今後の生活に生かしていきたいです」と意気込んだ。（鷺）

「仕事に誇りとやりがいを感じます」

ロビーでは第43回全国高等学校総合文化祭（2019さが総文）のマスコットキャラクターあさぎちゃんが来場者をお迎えします♪

文字から滲む書き手の心

今回、書道部門の都立足立東高校の矢口正樹先生が題名などを筆耕した。普段は社会科を教えているという矢口先生。隷書や楷書などを、その時の気分に応じて使い分けて書いているそうだ。矢口先生は、書の魅力を「書にはパソコンの文字とは異なる良さがあること」だと話す。様々な苦労もあるが、自分の心を鎮めて、見る人が読みやすい文字を書いているという。「脇役、裏方として頑張っていきたい」と言って微笑んだ

(上)一筆一筆丁寧に書写する矢口先生
(左)ホールの看板

むらさき草

本番後、公演を終えた生徒は「応援してくれた地元の人に恩返しができる、最高の舞台をつくれました」とやりきった顔で笑った。彼らの青春を、感動を一滴もこぼさずに言葉にして届けたい▼真っ赤な絨毯。高さ2メートルの鏡獅子。今年も、この国立劇場で全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演が行われた。ここは「文化部のインターハイ」と呼ばれる総文祭で優秀な成績を収めた高校生たちのみに許される、夢の舞台だ▼錦城高校新聞委員会は毎年この東京公演に都の記録係として参加し、全国の高校生たちの思いを新聞にして届けている▼記録係は、出演校をはじめ公演を支える司会、大道具、音響の高校生たちにも話を聞く。今回、福島県ふたば未来学園高校の演劇部に取材した。彼らが演じたのはノンフィクション作品『Indrah～カズコになろうよ～』。題材はすべて、実際に演劇部で起こったことだ▼彼らの住む福島県双葉郡には、東日本大震災の影響により休校となった5つの高校があるという。それらの高校が統合され、5年前にできたのがふたば未来学園高校だ▼演劇『Indrah～カズコになろうよ～』では、東日本大震災のことや仮設住宅のことも描かれている。リハーサルを前に、この東京公演までの道のりを話してくれた演劇部部長は「震災を経て成長した自分たちの姿を見てもらうことで、福島の人が元気だということを伝えたいです」と力強く話してくれた▼東京公演にやってくるのは日本音楽、郷土芸能、演劇の３部門。高校生による郷土芸能の舞台を見た時、彼らの一つひとつの所作に目が釘付けになった。自分と同年齢の人たちが「素晴らしい地元の文化を後世に伝えたい」と地元を思い、世界を目標にして日々練習に励んでいる。全国には、そんな高校生がたくさんいた▼誰かの心に残る1枚、錦城生に寄り添い続ける新聞。それが私たちの目指す場所だ。1年後、夢の舞台にやってくる彼らに負けないくらい成長した姿で、来年また国立劇場に行こう。（槿）

公演一覧

出演校	演目	部門
１日目		
都立国際高校	國際男児「ソーラン節」	オープニング
都立府中高校	「BIGBAND　JAZZ」	オープニング
創価高校	「大河」	日本音楽
和歌山県立橋本高校	「絃歌」	日本音楽
大分県立由布高校	「庄内神楽『天孫降臨』」	郷土芸能
都立南多摩中等教育学校	「八多化の響き」	郷土芸能
帯広北高校	「放課後談話」	演劇
鹿児島県立屋久島高校	「ジョン・デンバーへの手紙」	演劇
２日目		
日本音楽部門合同チーム	「編曲　元禄花見踊」	オープニング
佐賀県立佐賀西高校	「はにわ三態」「誓う」	オープニング
星野高校	「風景」	日本音楽
関西創価高校	「三つのフェスタルバラード」	日本音楽
熊本市立必由館高校	「肥後の鼓舞」	郷土芸能
沖縄県立八重山農林高校	「瑞穂の恵み～豊年祭より～」	郷土芸能
都立深川高校	「ヘアー」	特別公演
福島県立ふたば未来学園高校	「Indrah～カズコになろうよ～」	演劇
逗子開成高校	「ケチャップ・オブ・ザ・デッド」	演劇

2019全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演　2日目

最高の舞台で最大のパフォーマンスを

客席は連日の満員御礼

逗子開成高校『ケチャップ・オブ・ザ・デッド』のワンシーン

出だしを飾る優雅な音色　日本音楽部門合同チーム

２日目のオープニングを飾るのは都立白鷗高校、都立東久留米総合高校、青陵高校の３校からなる日本音楽部門合同チームだ。本番では坂本勉作曲の『編曲　元禄花見踊』を箏、三味線、鼓といった和楽器で演奏した。

また舞台の背景には桜が描かれており、終盤には桜吹雪が舞い散る演出も。上野の花見の様子を表現したこの曲にぴったりの雰囲気の中、日本の伝統の美しい音色が観客を魅了した。

演奏後、都立東久留米総合高校の大平菜月さん（２年）は「緊張しましたが、手ごたえを感じられる演奏ができました。合同チームのメンバーにはとても感謝しています」と笑顔を見せた。

透明感あるハーモニー　佐賀西高校

同じくオープニングを担当した佐賀県立佐賀西高校合唱部。公演では２曲を披露した。１曲目の『はにわ三態』ではこの曲のテーマである「泣く、笑う、狩る」を歌だけでなく足踏みや手拍子、掛け声を使って表現した。２曲目の『誓う』は全国高等学校総合文化祭佐賀大会のために作られた曲。本来は１００人前後で歌う曲だが、今回の公演では12人が透明感のある歌声で歌い上げ観客の心を魅了する。

本番が終わり、副部長の植田ももさん（２年）は「歌を歌うことの楽しさを改めて体感することができました」と話す。また、部長の田中美月さん（２年）は「今まで目指してきた舞台で佐賀の魅力を伝えられたことに感謝したいです」と語った。

色鮮やかな「風景」が蘇る　星野高校

日本音楽部門の星野高校箏曲部は清水脩作曲『風景』を披露した。この曲は３つの楽章から成り、それぞれの章で異なる風景や四季の移ろいを表現している。

演奏は息の合った礼からスタート。序盤から、やわらかくも力強い音色で観客を圧倒した。すべてのパートが同じリズムを刻む場面でも寸分のずれがない見事な演奏を繰り広げる。異なる高さの箏の音が調和し、色鮮やかな「風景」が思い起こされるような演奏だった。

一糸乱れぬ演奏で四季の移ろいを表現

部長の古寺優里さん（３年）は、本番の演奏を文句なしの１００点と評価。「あっという間でした。楽しく演奏することができました」と本番を振り返る。最後に「今後も毎日の基礎練習を欠かさず、日々努力していきたいです」とこれからの目標を語った。

今年も国立劇場で公演　関西創価高校

関西創価高等学校箏曲部が披露したのは三木稔作曲『三つのフェスタルバラード』だ。曲の場面ごとに特徴を際立たせる表現力や、繊細な指さばきで奏でる音色が観客を魅了した。

箏曲部は18年連続で全国高等学校総合文化祭に出場しており、東京公演は２年連続での出場となった。今年の総文祭には人数の都合上、参加できない部員がいたが、国立劇場の舞台にはすべての部員が一丸となって臨むことができたという。部員の武田美由紀さん（２年）は「演奏中に他の部員と目が合うと、自然と笑顔になりました。その笑顔が、観客の皆さんに届いていていれば嬉しいです」と微笑んだ。

息の合った演奏で観客を魅了

地元を誇りに　八重山農林高校

ホラの幻想的な音を合図に始まった舞台。米の豊作を願った豊年祭で行う演舞を再現した『瑞穂の恵み～豊年祭より～』を披露したのは、沖縄県立八重山農林高校郷土芸能部だ。沖縄に古くから伝わる太鼓や三味線などの楽器の美しい演奏によって、会場中に自然豊かな沖縄の情景が広がった。

「農林高校であることを活かして田植えの練習を実際にやり、感覚を掴みました」とリアルな演技の裏話を教えてくれたのは、部長の新城愛結さん（３年）。「地元八重山に心を寄せながら、助け合いの心を意味する『結い』を胸に演舞しました」と本番を振り返った。

全身を使ったダイナミックな演奏

大迫力の太鼓の音色　必由館高校

熊本市立必由館高校和太鼓部の演目『肥後の鼓舞』は民謡『おてもやん』に合わせ、軽快に始まった。演奏中はパフォーマンスに富んだ叩き方や主役となる楽器が激しく入れ替わる様子が観客を引き込んでいく。クライマックスでは全身に力を込めて太鼓を叩き上げた。終始、迫力のある演技に観客は圧倒されていた。

部長の今村美咲さん（３年）は「リハーサルではうまくできなかった会場全体に音を響かせることが、調整の結果改善できてよかったと思います」と笑顔で語った。

いい子ってなんだろう？　深川高校

特別公演『ヘアー』を演じた都立深川高校演劇部。「いい子とは何か」というテーマについて、主役のイシゲジョーが劇を通して悩む話だ。前半は小ネタを多く挟み度々会場に笑いが起こる。中盤から後半にかけては、観客に考えさせる長台詞を挟みつつ、動きの多い演技や軽快なテンポで独特の世界観を繰り広げた。全ての感情をさらけだすようなラストに、観客は劇に引き込まれていた。

上演終了後、「今までやってきたその集大成を見せられた」と語るのは部長の髙橋秀毅くん（３年）。イシゲジョー役の石毛晟くん（３年）は「ラストシーンは見た目だけでなく気持ちも込めてやりました」と話した。

実話を基にした友情物語　ふたば未来学園高校

ふたば未来学園高校は演劇『Indrah～カズコになろうよ～』を披露した。これは実話を基にしており、マレーシアからやってきた留学生インドラと演劇部員たちとの交流を描く。インドラが帰国した後、崩壊してしまった演劇部員たちの友情が、彼女との思い出を語り合う中で再生されていく、というストーリーだ。本人たちが当時の辛辣な部活内をリアルに演じ、劇場に足を運んだ大勢の観客を物語に引き込んだ。

部長の森崎陽さん（３年）は本番の演劇を「１日１点ずつ積み重ねてきたとすると、この劇の制作期間がちょうど１年なので３６５点です」と自分たちを評価。「地元の方にはご支援、応援いただいてきましたが、恩返しできたと思います」と笑顔を見せた。

本人たちの迫真の演技から目が離せない

ケチャップを用いた喜劇　逗子開成高校

東京公演のラストを飾ったのは、逗子開成高校演劇部の『ケチャップ・オブ・ザ・デッド』。ホラー映画を撮るため山奥に入った大学生３人が、１体のゾンビに遭遇する。彼らは今まで見てきたゾンビ映画の知識を駆使し、そのゾンビを利用して、よりリアルな映画を撮ろうと試みるという内容だ。

コメディ色が強く、ゾンビの独白やユーモアある台詞回しが絶えず観客の笑いを誘う。しかし、その中に考えさせられるような重い話題も挟まれており、喜劇とも悲劇ともとれる物語であった。

小道具の使い方も秀逸なこの劇。ラストシーンまで観客を飽きさせることのない１時間だった。

取材後記

今年で30回目を迎えた全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演。全国大会を勝ち抜いた高校生たちが「未来へ」というテーマの下、夏の終わりに国立劇場の舞台を彩った。各校、努力の成果を存分に発揮した最高無二の公演で、劇場に足を運んだ観客たちを惹き付けた。

自分たちと同じ高校生が作り上げる素晴らしい舞台に記録係として携わり、取材できたことは、とても貴重な経験となった。今回の取材活動を通して彼らからもらった刺激を糧に、これからのよりよい新聞作りへとつなげていきたい。

１部１部に思いを込めて

挟み込み作業の様子

パンフレットにアンケート用紙などを挟み込む作業も高校生が担当している。ロビーで作業中だった立川女子高校演劇部部長の甲斐久美子さん（３年）に話を聞いた。

立川女子高校演劇部は昨年の東京公演で、特別公演として『えいえんのおさんぽ』を演じた。毎年、特別公演を行った部活は、次の年に応援として参加するのが慣例なのだそう。教育委員会の方から誘いがあり参加したと話す。

挟み込み作業を行うパンフレットは全部で３０００部。演劇部の１年生３人、２年生７人、３年生３人の計13人で作業をする。膨大な数だが、甲斐さんは「昨年は出演、今年はお手伝いという形で東京公演に参加できました。この公演に関われて嬉しいです」と語った。（梅）

呈茶でいこいのひとときを

編集委員もほっと一息

演目と演目の合間、国立劇場の２階へ行ってみると、都内の高校の茶道部員が来場者に呈茶をしているブースがあった。お茶会では、置かれたイスに多くの来場者がぎっしりと座り、賑わいをみせる。来場者は高校生のお点前を間近で見ながら、お茶の味を楽しんでいた。

呈茶をしていたのは、東京都高等学校文化連盟茶道部門に所属している高校の生徒たち。実際にお点前をした都立府中西高校上村音葉さん（２年）は「いつもとは違う場なので、体感したことない緊張感がありました」と振り返る。美味しそうにお茶を飲んでいた来場者の小林富美子さんは「お茶はきれいに泡が立っていて、とても美味しかったです」と満足顔だった。（李）

高校生の活躍を見守る来場者たち

◎娘の晴れ姿を初鑑賞

本番１日目、劇場外のベンチで、仲良く会話していた羽尻宝さん・菜々美さん親子。娘の菜々美さん（１年）は創価高校箏曲部に所属し、今回の公演に出演した。菜々美さんは公演を「悔いなく終わることが出来ました」と振り返る。一方の宝さんは「ラッキーなことに座った席が娘の目の前だったんですよ」と嬉しそうに話してくれた。「今度は娘の代が後輩を引き連れて、ここに帰ってこられるように頑張ってほしい」とエールを送った。

本番について談笑する２人

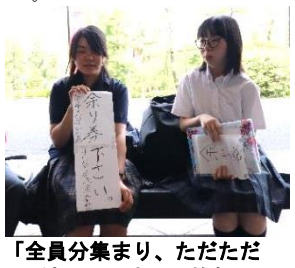
母校の活躍に期待

◎地元が題材の劇に関心

１日目の休憩時間にロビーでお茶を飲んでいた藤沼里美さんは、鹿児島県立屋久島高校の卒業生。母校の演劇部が出演することを高校の同級生から聞きつけ、来場したそうだ。劇の内容は、世界遺産に登録されている藤沼さんの地元、屋久島について。高校生が地元の自然に関する内容を取り上げ、演じることに関心を持ったという。最後に「力いっぱい頑張ってください」と後輩に期待を寄せた。

◎部員全員の座席を求めて

２日目の昼時、前売り券引換場前のベンチで「余り券下さい」の紙を持っていた麻布大学付属高校演劇部の川久保衣蕗さん（２年）と梅原由紀乃さん（２年）。演劇の勉強のため毎年当日券で観に来ているという。しかし今年から当日券が廃止されたため、「余り券」を急遽集めることに。１０時ごろから集め始め、１２時半には部員３５人全員分の券を手に入れることができたそう。２人は「人の優しさを感じました。券をくれた人の分まで楽しみたいです」と話した。（李・鷺・蓮）



「全員分集まり、ただただ嬉しいです」と笑顔